

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	中山 真里子
論文題目	Does Lexical Competition Play a Role in Word Recognition of Non-Roman Script Language? A Test for an Inhibitory Neighbor Priming Effect with Japanese Katakana and Kanji Words. 語彙競合は非ローマ文字の単語認識でも起こるのか カタカナ語と漢字語における抑制的隣接語プライミング効果の検証
審査要旨	<p>中山はこの論文の中で、Interactive-Activation モデルに代表されるような活性化モデルが英語などのアルファベット言語の語彙処理ばかりでなく、日本語のカタカナ語や漢字語の処理の説明にも有効であるかどうかを検討するために、形態隣接語プライム及び形態隣接非語プライムを使ったマスク下のプライミング効果の観察を試みた。</p> <p>活性化モデルによれば、心的辞書内で活性化された形態類似性が高い語彙表象同士(e.g., side - TIDE)は、互いの活性化を抑制するように機能すると考えられている。この語彙競合のメカニズムは、ひとつの刺激に対して、対応するひとつの語彙表象が選択されるためには不可欠なメカニズムであり、視覚刺激として与えられた語を正しく認識する上で重要な役割を果たすものと考えられている。</p> <p>英語を使った先行研究によれば、語彙判断課題において、マスク下の形態隣接語プライムからは抑制的なプライミング効果が観察されるのに対して、マスク下の形態隣接非語プライムからはそのような効果は観察されないことが知られている(e.g., Davis & Lupker, 2006; Nakayama, Sears & Lupker, 2008)。活性化モデルによれば、形態隣接語プライムによる抑制効果は、語彙表象間の語彙競合のメカニズムを反映するものと説明される。一方、形態隣接非語プライムは、対応する語彙表象が存在しないことから、語彙競合のメカニズムが関与しないため、抑制的なプライミング効果は観察されないと説明する。この語彙表象間の競合のメカニズムを日本語の読みの処理にも仮定すれば、日本語を読む際にも、英語などのアルファベット言語を使った先行研究と同様、語彙判断課題において、形態隣接語プライムによる抑制的プライミング効果及び形態隣接非語プライムによるその効果の消失が期待されることになる。</p> <p>そこで、中山は第2章の実験 1A, 1B, 2 で、カタカナ語ターゲットを使った語彙判断課題を用いて、これらの予測について検討した。実験の結果、カタカナ語ターゲットにも、形態隣接語プライムによる抑制的プライミング効果が観察され(e.g., スタイルスマイル)、形態隣接非語プライムでは、抑制効果は観察されなかった(e.g., スコイルスマイル)。</p> <p>次に、第3章の実験 3-6 では、漢字二字熟語をターゲットとした語彙判断課題において、同様の予測について検討したところ、形態隣接語プライムからは誤反応率において抑制効果が認められたものの、反応時間のデータには何の効果も観察されなかった(e.g., 支那 - 支障)。漢字はそれ自体が形態素であるため、形態隣接語同士は、同じ形態素を共有することになる。したがって、プライムとターゲットが形態素を共有することにより、これまでの英語やカタカナ語による研究では期待されなかった形態素レベルの処理における促進効果が漢字熟語の場合には生じている可能性がある。そこで、中山は、ターゲットと漢字一文字を共有する形態隣接非語プライムを使った場合(実験 5 と 6: e.g., 支那 - 支障)、及びターゲットに含まれる漢字一文字をプライムとした場合(実験 7: e.g., 支 - 支障)のデータを収集し、いずれの場合にも、大きな促進効果が観察されること明らかにした。そして、こうした漢字の共有による大きな促進的プライミング効果の存在が、語彙競合による抑制的プライミング効果をマスクしてしまうことにより、漢字熟語の場合には、形態隣接語プライムによる抑制的プライミング効果が観察され難い可能性が高いことを示した。</p> <p>最後に、第4章で中山は、これらの実験で収集したデータを踏まえて、活性化モデルによる語彙競合のメカニズムは、英語などのアルファベット言語ばかりでなく、日本語のカタカナ単語や漢字熟語の読みにおいても機能している可能性が高く、語彙競合のメカニズムは、どのような言語にも適用可能なユニバーサルな仮説であろうと結論し</p>

ている。このように、中山の論文は、英語などのアルファベット言語を使った研究において導きだされた仮説が、日本語のカタカナ単語及び漢字熟語にも適用可能であることを示した大作である。さらに、並列分散処理の枠組みに基づいたコネクショニスト・モデルでは、語彙表象という概念も、表象間の抑制のメカニズムも仮定されない。そのため、中山の論文の中で報告されているデータは、コネクショニスト・モデルの限界をも示す可能性を秘めた重要なデータである。

一部の審査員からは、今後の研究の方向性として、コネクショニスト・モデルによる説明の可能性を、もう少し考慮してみる必要があるかもしれないという提案や、漢字語の形態隣接語の定義に関して、今後さらに考察すべき点などに関するアドバイスはあったものの、審査員全員の見解として、この論文は博士学位請求論文にふさわしく非常に質の高い論文であるとの評価で一致した。したがって、本審査委員会では、中山の論文を博士学位請求論文として授与に値する論文であると判断した。

公開審査会開催日	2013年 4月 5日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	Ph.D(西オタリオ大学)	日野 泰志
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	Ph.D (ノースウェスタン大学)	福澤 一吉
審査委員	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所・研究員	博士(学術)千葉大学	伊集院 睦雄